

「ある島国のお話」

農業者 佐藤宗史

これは海に囲まれたある島のお話です。

昔々その島の民は食料を求めて家族で移動しながら暮らしておりました。獣や魚を捕らえ、木の実を拾い、野草を摘み、季節の移ろいと共に食料を確保出来るところへ移動する生活でした。そのような中で食料が豊富で安全な土地を見つけられたことで、定住する様になり、核家族の生活から血縁関係の小さな集団生活へと変化して行きました。

そんな時に海の向こうから食料を採るだけでは無く、植物を植え育てるという考え方や技術が伝わってきました。それがこの島の「農業」のはじまりです。そのおかげで多くの食料を自分たちで生産出来る様になると、小さな集団生活をしていたグループが農業に適した土地に複数定住することとなって行き、「村」と呼ばれる土地になりました。その村が島の中にいくつも誕生し、村同士の交流がはじまり言語や宗教、掟などの現代に通じて行く文化が出来、その先に村が集まって島に「国」が出来上がって行きました。

その島国は水が豊富で土地は肥え、季節の変化がはっきりしており農業には適しており、また周りは海に囲まれ魚も沢山捕ることが出来ました。その島の民は勤勉であり、海の外の国から伝わる技術や文化も自分たちで工夫をし発展させることが得意でした。農業や漁業においても恵まれた自然環境を生かしながら沢山の種類の農畜産物を生産し、海産物も捕るだけでは無く、育てる養殖などの技術を

生みだして安定的な食料を生産しました。

ただし、農業や漁業といった生業は自然相手に上手くいかない時もあり、そんな時には皆で助け合い困難を乗り越えて行ったそうです。その助け合いを「結い」と呼んだり、現代では「協同」と呼んだりします。

良い時も苦しい時も助け合い、支え合ってその国は発展してきた歴史の中で、現代はどんな時なんでしょうか。また「結い」や「協同」の価値観をこれからも繋いで行くには何が必要でしょうか。農業においてインフラを維持出来、農地をフル活用出来る環境のうえにしか持続可能な農業は成立しないと考えます。農村部においてインフラの維持が大きな課題になっています。農地を維持するには水利などのインフラの維持も欠かせないのですが、補助金等の金銭面での支援があってもインフラ維持のプレーヤーが村には居ないのです。

いまいちど「村」を見直し、新たな国作りのタイミングでは無いかと思います。作る側と食べる側という二極の話では無い大局の話が出来ればと願っております。その中心には「結い」が必要で、「協同の力」を発揮しどころではないでしょうか。その為にも役職員の皆さん、組合員の皆さん、「ある島国のお話」の続きは皆さんがキャストですよ。

さあ新しい幕をあげましょう。

(さとう たかし)